

『遺老説伝』注釈（10）-巻第二
第六七話～第七二話-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2013-05-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堂野前, 彰子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/13925

『遺老説伝』注釈(10)

——巻第二 第六七話〜第七二話——

The annotation of Irousetsuden (10)

博士後期課程 日本文学専攻 二〇〇七年度入学

堂野前 彰 子

DONOMAE Akiko

【論文要旨】

『遺老説伝』は、琉球王府解体期まで書き継がれた史書『球陽』の外巻として、十七世紀末から十八世紀中葉にかけて編纂された、琉球唯一の説話集である。

本書に関して、簡単な語釈と読み下しを施したテキストが、現在までにいくつか出版されている。しかし、それらは一話一話がもつ世界観に深く踏み込んだ注釈がなされたものではない。本編はそうしたことに鑑みて、一話一話を正確に読み、漢文の語彙の意味を探索し、補説でその説話のもっている背景、意義、機能等について、紙数の許す限り丁寧に記述することを旨とした。

各話の末尾には、当該箇所注釈を担当した者の氏名を記してある。各話に対する語注・補説は、その担当者が各々の責任のもとに行っているが、その記述内容は討議を重ねた結果が反映されたものとなっている。

今回は前回に引き続き第六七話から、紙幅の都合上、第七二話までを取り扱うこととした。以降も引き続き注釈作業をおこない、ある程度のもたまりをもって、定期的に発表をしてゆく考えである。

【キーワード】 遺老説伝、注釈、説話、琉球、球陽

凡例

- 一、本注釈は、漢文体の原文、およびその訓読、語注、補説とからなる。
- 一、本文は、主に沖縄文化史料集成(嘉手納宗徳編訳)の校本を参照し、学芸社刊の『遺老説伝』(島袋盛敏訳)によって補った。また適宜諸本(伊波文庫本、宮良殿内本、護得久本)によって校訂を加えた。原文に付される返点は、私案による。
- 一、訓読は、右の校訂によって作成した漢文体の原文を訓み下したものである。訓み下しにあたっては、沖縄文化史料集成の本文を参考にしたところが多いが、私案によった部分もある。
- 一、本文の前に附されたアラビア数字は、話番号を示している。
- 一、原文の割注箇所は()に入れて区別した。
- 一、語注は、可能な限り詳細に施した。
- 一、補説は、語注で述べきれなかった内容を記した。

- 一、語注中の↓印は、参照箇所を意味する。
 一、本注釈中で引用された主な書名の略称とその底本は、以下の通り。

○『遺老説伝』活字本文

- ・角川本
↓嘉手納宗徳編訳『琉陽外巻遺老説伝 原文・読み下し』（沖縄文化史料集成6）角川書店 一九七八年
- ・学芸社本
↓島袋盛敏訳『琉陽外巻遺老説伝』学芸社 一九三五年

○『遺老説伝』の主な諸本

- ・伊波本Ⅰ
↓伊波普猷文庫 四巻本 琉球大学附属図書館蔵
- ・伊波本Ⅱ
↓伊波普猷文庫 三巻本 琉球大学附属図書館蔵
- ・護得久本
↓東恩納寛惇文庫 護得久朝常毛筆写本 四巻本 沖縄県立図書館蔵
- ・宮良殿内本
↓宮良殿内文庫本 琉球大学附属図書館蔵
- ・尚家本
↓尚家御側本 那覇市歴史博物館蔵
- その他

- ・由来記
↓横山重他編『琉球国由来記』（琉球史料叢書）井上書店
- ・旧記
↓横山重他編『琉球国旧記』（琉球史料叢書）井上書店
- ・中山世鑑
↓横山重他編『中山世鑑』（琉球史料叢書）井上書店

- ・中山世譜
↓横山重他編 蔡温本『中山世譜』（琉球史料叢書）井上書店

- ・球陽
↓球陽研究会編『球陽 原文編』『球陽 読み下し編』（沖縄文化史料集成5）角川書店

- ・神道記
↓横山重編著『琉球神道記』大岡山書店

- ・おもしろさうし
↓外間守善 西郷信綱校注『おもしろさうし』（日本思想大系18）岩波書店

- ・御嶽由来記
↓小島環禮校注『神道大系神社編52沖繩』所収康熙三十六年本『宮古島旧記』神道大系編纂会

- ・雍正旧記
↓小島環禮校注『神道大系神社編52沖繩』所収雍正五年本『宮古島旧記』神道大系編纂会

- ・宮古嶋記事
↓小島環禮校注『神道大系神社編52沖繩』所収『宮古嶋記事』神道大系編纂会

- ・記事仕次
↓平良市史編さん委員会編『平良市史第三巻資料編Ⅰ』所収『宮古島記事仕次』平良市役所

一、本注釈を作成するにあたり、多くの先学の著書・論文から教示を得た。紙幅の都合上、当該箇所において書名・氏名のみを記した箇所もあるが、なお遺漏の点があるかもしれない。

一、なお今回の注釈は木村淳也、成者赫、堂野前彰子の三名が担当した。

【原文】

一往昔之世、浦添郡城間邑、有「羽地祝女者」。自「那覇」坐レ船歸レ郷、行到「洋中」、陡遭「逆風」。擱「破船隻」、祝女溺死。近處之人、深哀「恤之」、收「其死骨」、葬「之于古重嶽」(神名曰「羽地郡筑用加那志」)。至「于後日」、屢見「靈感」、無「禱不」應。遂爲「崇信」而祈禱「焉」。

【訓読】

一往昔の世、浦添郡城間邑に、羽地祝女なる者有り。那覇より船に坐して郷に歸るとき、行きて洋中に到り、陡かに逆風に遭ふ。船隻を擱破して、祝女溺死す。近處の人、深く之を哀恤し、其の死骨を收め、之れを古重嶽(神名を羽地郡筑用加那志と曰ふ)に葬る。後日に至り、屢々靈感を見はし、禱りて應ぜざるは無し。遂に崇信して祈禱を爲す。

【語注】

○浦添郡城間邑…「浦添郡」↓第七話語注。「城間村」は、屋富祖村の北に位置。浦添間切最大の村で、東は伊祖村、北は牧湊村、西は海に面する。『浦添市史』によると、古代、又吉地区との併合によって形成された、との伝承があるという。『おもろさうし』に「くすくまのこはもり」(巻一五・一〇六五)。「琉球国高突帳」に同村名がみえており、『由来記』にはコバ森・アマカケノ嶽・古重嶽・波平森等の拝所が記される。現在、旧村域西部は米軍に接収され、牧港補給地区となっている。

○羽地祝女…『由来記』では「羽地巫」、『旧記』では「羽地巫女」と記

載。羽地間切の祝女のことか(↓補説)。○那覇…↓第九話語注。○擱

破…『歴代宝案』訳注本の語注に「船が浅瀬などにのりあげて動けなくなる」とあり、「閤破」で「座礁のこと」としている。第四九話にも同用例あり。○哀恤…あわれみめぐむ。○古重嶽…浦添市港川・崎原にある御嶽。『由来記』によると城間ノロが祭祀を掌った。神名は、本話では「羽地郡筑用加那志」と記されるが、『由来記』には「羽地コイチコイチヨウガナシ」。『浦添市史』は「古重嶽は亀瀬にあった」とし、「漂着した羽地ノロを葬しニライカナイの神として御嶽にしたと思われる、旅祈願所になっていた」という。亀瀬は、牧港補給地区の北方にある「空寿崎」のこと。また『中頭郡誌』所載の「中頭郡全図」には「コチヨノサキ」と記されている。「古重」「空寿」「コチヨ」の名称は、何れも御嶽の神名が転訛したものと思われる。

【補説】

本話は『由来記』巻一四「古重嶽」条、『旧記』巻之六「古重嶽」条に依る。海で遭難したノロの遺骸を葬った場所が御嶽となったという、御嶽由来譚である。

本話は、羽地ノロを城間村出身のように記しているが、『由来記』、『旧記』の本文は、那覇からの帰途で溺死したと記すのみで、出身のことには触れていない。代々のノロは、就任すると王府からの辞令交付があり、首里に上って自分の属する地方(間切)を管轄するオオアモシラレとともに祈るという。また国王の崩御や聞得大君の就任に際しても、中央へとノロが召集された。本話の羽地ノロはどのような召集からの帰

途で遭難したと考えてよいかもしれない。だが、「羽地ノロ」という存在は、『由来記』などにおいては確認できない。高良倉吉「琉球辞令書の一覧表と収集現況」に記された過渡期（島津侵入→向象賢摂政就任）の辞令書に、「羽地間切の大ノロクモイ」なる職が見えるが、詳細は不明である。

古重嶽は、東シナ海に臨む岬・空寿崎のことと考えられる。本話で説かれる「靈感」の内容は不明だが、『浦添市史』が指摘するように（↓語注）、航海の安全に関するものがあつたと思われる。霊験あらたかな人物の骨を「神骨」とし、それが埋葬された場所を御嶽として崇めるという御嶽由来説話は、本書にしばしば見られる型であり、特に第二六話は、死したノロを祀るという点で本話と近似している。この話は、慶良間の人々が祭祀の方法を伝授してもらうため、ハチライ、コセライという豊見城のノロ二人を招いたが、相次いで病死したため、その遺骸を葬り、後にその場所を神嶽として崇信したという内容。この話の依拠元となつた『由来記』本文には、二人のノロを祀つた船藏御嶽に対して「村中ノ船」が「出入ノ時拝申」したとある。本話の羽地ノロも、その葬られた「岬」という場所柄、守船の神となつた可能性を考えて良いだろう。さらに第二六話を見ると、船藏御嶽には「竜宮神」なる神が別に祀られており、大漁の際に魚を献上した旨が記される。永藤靖はこの記述を取り上げ、祝女を中心とした共同体の祭祀形態に触れながら、祝女と海＝竜宮（ニライ・カナイ）とが密接な関係を結ぶことを指摘している。本話では詳述されない「禱りて應ぜざるは無」い「靈感」には、海の豊穡＝世（ユ）の招きも含まれるのかもしれない。

しかし、この後日における「靈感」の發揮という部分は、依拠本文である『旧記』には見られず、『遺老説伝』が独自に添加したものである。このような霊験の強調は、『遺老説伝』の文芸性とも深く関わる問題と言えよう。

（木村 淳也）

68

【原文】

一太古之世、宮古島茫茫曠野、人物未ニ始生ニ、草木亦未ニ畢出ニ。時
有二男一女之神一、降ニ下于平良漲水地一。而人物生ニ于此島一也。
男名曰ニ戀角一、女名曰ニ戀玉一。自レ此之後、萬象畢成、人物繁顚。
遂乘ニ清風一而去焉。既而經ニ數百年一、平良隅屋地、有ニ大姓家一、富
貴甚殷。未ニ嘗生レ男育レ女。常祈レ神拜レ天、許ニ愿求レ子。幸生ニ
一女一。此女、賦性敏慧、姿色絶倫。郷人見レ之、無レ不ニ稱羨一。父
母、深珍ニ愛之、如レ玉如レ寶、常思ニ擇ニ他佳配一、以爲中嗣子上。
時人多有ニ媒求一、而不ニ輕與ニ于人一。女子、常重ニ其身一、深在ニ香
閨一、不ニ敢出レ外。年十五歲、不レ想爲ニ妖蛇所レ魅、忽得ニ懷
妊一。父母見レ之、驚問曰、汝、未レ嫁ニ于人一、何以懷妊耶。女子、
把ニ母衣袖一、潸然流レ涙曰、有ニ一怪事一、當ニ夜深時一、就レ寢而
寐、香氣馥馥、繞ニ滿寢室一。幻有ニ一少年一、白面秀眼、身穿ニ彩
衣一、手携ニ囊一、潛入ニ閨中一、如レ臨ニ枕邊一。神魂昏迷、不レ省ニ
人事一、却得ニ懷妊一。而汚辱惡名、流ニ于萬世一。今、有ニ何面目一、

立_二于人世_一乎。我、欲_レ投_二身于深淵_一、以洗_中汚穢之名_上、奈父母俱老、若我、先_レ親而死、缺_二少孝養_一、獲_レ罪極大。則進退兩難、躊躇未_レ決者也。哭淚如_レ雨、未_二敢稍息_一。父母慰_レ之曰、汝勿_二深憂_一、能有_二一計_一。知_二其男情絲_一、以洒_二其汚名_一哉。即針穿_二線條數千丈許_一、給_二與其女子_一、再_三囑令曰_二、必俟_二少年入寢_一、把_レ針刺_二其首_一。女子、領_レ令而退。當_二此夕_一也、果有_二少年亦來_一。女子、即如_二母命_一、將_レ針刺_二首_一。少年、受_二針線_一而去。已至_二天明_一、則父母携_二女子_一、尋_二求其線所_レ逝之處_一、往_二至漲水地_一。石洞之中、有_二一大蛇_一、蜿蜒而臥。遙看_二其首上_一、果在_二針尖_一。父母大嘆曰、男娶女嫁、人道之宜也。今夕爲_二妖蛇所_レ誣、而得_二妊孕_一者、豈非_二遺_レ辱名者_一也乎。母與女子相共哭慟、決_二要_二縊死_一。其夜女子、夢見_二大蛇_一。臨_二枕邊_一亦來曰、我是往古之世、創_二建此島_一之戀角後身、天神再生、變爲_二此身_一也。只欲_レ立_二護國之神_一、今來_二於此地_一、與_レ汝交媾。想必生_二三女_一。年及_二三歲_一、好抱_二此子_一、携來_二漲水_一。醒覺視_レ之、四壁寥條、並無_二一物_一。由_レ是、女子細將_二此事_一、說_二知父母_一。父母聞_レ之曰、眞奇怪事也。若夢有_二靈驗_一、生_二得三女_一、此之愁中喜事、何足_レ憂焉。在_二昔間_一、日往月來、已滿_二二十个月_一、果生_二三女_一。俱是生質俊爽、容貌異常、已及_二三歲_一時、其母携_二三女_一、往_二于漲水_一。忽見_二大蛇_一、自_二嶽中_一出來、首橫在_二于公藏之垣_一、尾掛在_二于漲水嶽之上_一、眼如_二三破星_一、牙似_二三利劍_一。張_レ口掉_レ舌、翻_レ身騰躍。其母、肉戰心裂、魂不_レ附體。遂抛_二三棄三女_一、走去回_レ家。三女俱無_二懼色_一、急攀_二大蛇_一、取_レ首撫_レ尾、不_二敢少離_一。大蛇、以_レ舌舐_レ子、兩情相決。既而大蛇帶_二三女_一、飛_二

入_二嶽中_一、以爲_二護守神_一、而消滅焉。大蛇、終起_レ雲馳_レ霧、放_二三光上天_一。由_レ是、人皆尊_二信之_一、以爲_二神嶽_一。弘治年間、仲宗根豐見親、跟_二隨大將軍大里等_一、往_二到八重山_一、誅_二討保武川赤蜂之罪_一。豐見親、親詣_二漲水嶽_一、虔誠告_レ禱曰、吾今隨_二大將軍_一、征_二伐八重山_一。伏祈、神、鑒_二此誠心_一、賜_二我捷功_一。既撥_二戰船_一、直到_二八重山_一、略不_レ費_レ力、大獲_二三勝功_一、奏凱而回。始築_二四圍石垣_一、內植_二樹木_一、以爲_二還愿_一。後建_二拜殿_一、以備_二海島壯觀_一。

【訓読】

一太古の世、宮古島は茫々たる曠野にして、人物未だ始めて生れず、草木も亦た未だ畢く出でざる。時に一男一女の神有り、平良漲水の地に降下す。而して人物此の島に生るるなり。男の名を戀角と曰ひ、女の名を戀玉と曰ふ。此れよりの後、萬象畢く成り、人物繁顆す。遂に清風に乗じて去る。既にして數百年を経て、平良の隅屋の地に、大姓家有り、富貴甚だ殷なり。未だ嘗て男を生み女を育てず。常に神に祈り天を拜し、子を求むるに許愿す。幸に一女を生む。此の女、賦性敏慧、姿色絶倫なり。郷人之を見て、稱し羨まざる無し。父母、深く之れを珍愛し、玉の如く寶の如くして、常に他に佳配を擇び、以て嗣子と爲さんことを思ふ。時に人多く媒求すること有れども、而も輕々しく人に與へず。女子、常に其の身を重んじ、深く香聞に在りて、敢て外に出でず。年十五歳、想らずも妖蛇の魅する所となり、忽ち懷妊を得る。父母之れを見て、驚き問ひて曰く、「汝、未だ人に嫁せず、何

を以て懷妊するや」と。女子、母の衣袖を把り、潛然として涙を流して曰く、「一怪事有り、夜深き時に當り、寢に就きて寐めれば、香氣馥馥として、寢室に繞り滿つ。幻に一少年有り、白面秀眼、身に彩衣を穿ち、手に一囊を携へ、潛かに閨中に入り、枕邊に臨むが如し。神魂昏迷して、人事を省せず、却て懷妊を得る。而して汚辱せる惡名を、萬世に流す。今、何の面目有りて、人世に立たんや。我、身を深淵に投じ、以て汚穢の名を洗がんと欲するも、奈せん父母俱に老ひ、若し我、親に先んじて死せば、孝養を缺少し、罪を獲ること極めて大ならん。則ち進退兩難、躊躇して未だ決せざる者なり」と。哭涙雨の如く、未だ敢て稍しも息まず。父母之れを慰めて曰く、「汝深く憂ふる勿れ、能く一計有り。其の男の情絲を知り、以て其の汚名を洒がん」と。即ち針に線條數千丈許りを穿ち、其の女子に給與し、再三囑令して曰く、「必ず少年の入寢するを俟ち、針を把りて其の首に刺せ」と。女子、令を領して退く。此の夕に當り、果して少年亦た來る有り。女子、即ち母の命の如くし、針を將て首に刺す。少年、針線を受けて去る。已に天明に至り、則ち父母女子を携へ、其の線の逝く所の處を尋ね求めて、漲水の地に往き至る。石洞の中に、一大蛇有り、蜿蜒して臥す。遙かに其の首上を看れば、果して針尖在り。父母大いに嘆じて曰く、「男娶り女嫁するは、人道の宜なり。今夕妖蛇の誣する所と爲りて、妊孕を得たるは、豈に辱名を遺す者に非ずや」と。母と女子相共に哭慟し、縊死を要むるを決す。其の夜女子、夢に大蛇を見る。枕邊に臨んで亦た來りて曰く、「我は是れ往古の世、此の島を創建せし戀角の後身、天神の再生にて、變じて此の身と爲れるなり。

只だ護國の神を立てんと欲し、今此の地に來り、汝と交構す。想ふに必ず三女を生まん。年三歳に及ばば、好く此の子を抱き、携へて漲水に來れ」と。醒覺して之れを視れば、四壁寥條、並しも一物無し。是れに由りて、女子細かに此の事を將て、父母に説き知らす。父母之れを聞きて曰く、「眞に奇怪の事なり。若し夢に靈驗有りて、三女を生得せば、此の愁中の喜事、何ぞ憂ふるに足らんや」と。荏苒の間、日往き月來り、已に十个月に滿ち、果して三女を生む。俱に是れ生質俊爽、容貌異常、已に三歳に及ぶの時、其の母三女を携へ、漲水に往く。忽ち大蛇を見るに、嶽中より出で來り、首は横たへて公藏の垣に在り、尾は掛りて漲水嶽の上に在り、眼は皎星の如く、牙は利劍に似たり。口を張り舌を掉ひ、身を翻し騰躍す。其の母、肉戰き心裂け、魂體に附かず。遂に三女を抛棄し、走り去りて家に回る。三女俱に懼色無く、急に大蛇に攀ぢ、首を取り尾を撫で、敢て少しも離れず。大蛇、舌を以て子を舐め、兩情相浹し。既にして大蛇三女を帶し、嶽中に飛び入り、以て護守の神と爲りて、消滅す。大蛇、終に雲を起し霧を馳せ、光を上天に放つ。是れに由りて、人皆な之れを尊信し、以て神嶽と爲す。弘治年間、仲宗根豐見親、大將軍大里等に跟随し、八重山に往き到りて、保武川赤蜂の罪を誅討す。豐見親、親しく漲水嶽に詣で、虔誠禱を告げて曰く、「吾今大將軍に隨ひ、八重山を征伐す。伏して祈る、神、此の誠心に鑒み、我に捷功を賜へ」と。既に戰船を撥し、直に八重山に到り、略ぼ力を費さず、大いに勝功を獲、奏凱して回る。始めて四圍に石垣を築き、内に樹木を植え、以て還愚を爲す。後拜殿を建て、以て海島の壯觀に備ふ。

【語注】

○平良漲水地：『正保国絵図』に「宮古嶋はり水」、『雍正旧記』に「漲水港」とある。宮古島市街地の北にある港湾で、現在の平良港にあたる。近代以前は漲水泊・漲水港と称され、古琉球から現在まで宮古島の玄関口として重きをなした。ちなみに、「平良港」と呼称されるのは第二次世界大戦後である。王府との交易は一三九〇年、与那覇勢頭豊見親が宮古島東部の白川湾から出帆し、入貢したことに始まるという（『球陽』）。白川氏二世の恵幹は天順年間（一四五七～六四年）、漲水港近くを拠点とする仲宗根豊見親を伴って中山に上っており、一五世紀中頃には漲水港に交易の拠点が移ったと考えられる。○戀角：コイツヌ。神名。『記事仕次』、『宮古史伝』は「古意角」。○戀玉：コイタマ。神名。『記事仕次』、『宮古史伝』は「姑依玉」。○乗清風而去：『由来記』の「上天シ給フ」、『旧記』の「乗風上天」にあたる語。○平良隅屋：住屋（スミヤ）とも。現・宮古島市平良西里の尻間に住屋遺跡がある。平良港を見下ろす標高約十八メートルの石灰岩台地に位置。一二世紀後半より一六世紀頃にかけてのグスク時代の集落遺跡である。地元では「スミヤ」ともいう。グスク時代以来、宮古の政治・経済の中心であった。一九七六年には当該遺跡から多くの遺物が発掘されている。○珍愛：めずらしがって愛する。大切にする。○香閨：かおりのある部屋。婦人の室。閨房。○年十五歳：『由来記』には「十四五歳ノ頃」。○潸然：涙を流すさま。さめざめと。「潸焉」に同じ。○馥々：香気が盛んなさま。○神魂昏迷：心が乱れくらむ。また、くらます。○情絲：「絲」は「由」に同じ。わけ。真相。由来する事情。○線條：糸。○入寢：ねいる。○

蛭蟠：「蛭」は「うねうねと長いさま」。「蟠」は「わたがまる。とぐろを巻く」。「蟠蜿」に同じで、龍蛇の動くさまを言ったものだろう。○人道宜：人として踏み行う道の理。『由来記』に「浮世ノ慣ヒ」。○荏苒間：↓第五八話語注。○抛棄：なげすてる。ふりすてる。「抛擲」に同じ。○皎星：かがやく星。また、明るい星。○兩情相決：両方の心がうちとけているさま。○神嶽：漲水御嶽をいう。方言では「パルミズ」、「ピャルミズ」で、ツカサヤー（司屋）とも。平良港の東方約二〇メートルに所在するが、琉球王国時代には蔵元と平良港の間に位置し、西には沖に向って水門が設けられ、海水がその中まで入ってくるように平良浜の渚の岩上に建てられていたという。敷地面積一二八坪、ガジュマル・クバの太木が生い茂る石垣で囲まれた、宮古の中心的存在の御嶽である。鳥居→参道→灯籠→拜殿→神殿と続く神社様式をとり、漲水神社ともよばれる。祭神は『由来記』、『御嶽由来記』ともに「弁財天女」とし、前者に「公儀ノ御願・諸船海上安隠ノタメ、且、諸願ニ崇敬」、後者に「首里天加那志美御前御爲諸船海上安隠之爲メ諸願ニ付崇敬」とある。両書および『雍正旧記』等には、コイツノ・コイタマという男女二神が漲水の波打際に天降りして草木を生やし、宮古の人の祖となったので、同所に御嶽を建てたという創世神話が語られている。○弘治年間：尚真王十（一）二十七（一四八八～一五〇五）年。○仲宗根豊見親：生没年未詳。一五世紀末から一六世紀初にかけての宮古の首長。字は空広、諱は玄雅。忠導氏の元祖で目黒盛豊見親の玄孫にあたり、「真誉の子」の長男であるが、叔父の根間の大親が早死にして子がなかったため、その養子となる。幼少のころより才能非凡といわれ、宮古歴史上の英雄となる。

首長になった豊見親は平良・城辺・下地の各地へ赴いて諸勢力と協議し、最初の事業として飲料水確保のための井戸掘り工事に着手した。その他大きな功績として、八重山征伐、歳元設置、下地橋道の築造などがある。○虔…つつしむ。「謹」に通じる。○大將軍大里等…詳細不明。

沖繩本島の大里を本拠地とする按司と思われる。○跟随…↓第五八話語注。○八重山…石垣島・西表島の二大島と周辺の竹富島・鳩間島・小浜島・黒島・新城島・波照間島などの有人島からなり、「八重山島」とも総称された。方言では「ヤイマ」または「ダーマ」といい、沖繩本土では「エーマ」とよぶ。古くは宮古・八重山を「太平山」と総称していた。

○保武川赤蜂…「ホンガワラアカハチ」。「オヤケアカハチ」とも。生没年未詳。一五世紀末、八重山の大浜村にあって豪勇をもって聞こえ、近隣を制圧して宮古勢と対立した人物。貢を絶って首里王府に反旗をひるがえし、逆従として王府征討軍により誅伐された。アカハチは「心おこり、老をあざむき、幼をあなどる」不逞の人物として登場するが(『球陽』、王府側の記録や俗説のみで、その人物像は乱の原因とともに不詳。口碑によると、アカハチは八重山南端の弧島・波照間島で生まれ、幼児の頃より風貌怪異、長じて筋骨たくましく、威名陸々たるものがあったという。○奏凱…戦勝の凱歌を奏すること。○内植樹木…漲水御嶽内にクバの老樹が数株植えてある。口碑によれば、コイツヌとコイタマ二神が島内の悪魔を退治し、それまで島内の人民を苦しめていた鬼を搦め捕って黄泉国に追放した時に植えられたものと言ひ、また、漲水御嶽のクバが枯れた時には鬼が現われる、とも伝承されている。○還願…「還願」と同じ。誓言を履行する。また神へのお礼のため祭祀をする。

【補説】

『由来記』巻二十「漲水御嶽・弁財天女」条、『旧記』巻之九「漲水嶽」条、および『御嶽由来記』「漲水御嶽・弁財天女」条に拠る。

本話は宮古島市平良にある「漲水御嶽」を中心にストーリーが展開する。その構成は、『由来記』・『旧記』・『御嶽由来記』に所載された説話と同様に、①コイツヌ・コイタマによる島建て譚、②蛇婿入・苧環型説話、③仲宗根豊見親の英雄譚の三段落からなる。しかし、『記事仕次』と『宮古史伝』には、これらの段落がそれぞれ単独な物語として記述され、『記事仕次』には、①コイツヌの宮古創世神話のみが、『宮古史伝』には、①宮古創世神話、②苧環型説話、③仲宗根豊見親による漲水御嶽創成が、それぞれ独立した伝承として収録されている。とくに『宮古史伝』における創世神話では、天岩戸神話や高天原神話など、ヤマト神話のモチーフに、中国の陰陽五行説を取り入れた形で構成されており、さらに宮古の創世神、コイツヌ・コイタマの系譜までもが記されている点は注目される。

本話の蛇婿入・苧環型説話は、一人の美しい女が、夜ごと通いくる男によって妊娠し、その男の素性を知るために、糸を通した針を男の首に刺し、翌日、その糸をたどってみると、コイツノの化身である大蛇であったという展開をとる。このような蛇婿入・苧環型説話は、ヤマトの三輪山伝承を始めとして世界的に多く分布しているものである。特に、本話は『古事記』中巻のイクタマヨリヒメの蛇婿入り譚と酷似し、同一系統のものであることはすでに知られている。

沖繩ではこのような型の説話が「アカマター」伝承として広く知られ

ており、口碑も数多く伝わっている。その代表的なものとして、「狩俣の蛇神の子」や「読谷の蛇婿入り」などがあり、沖縄全地域にかけて類話が存在している。しかし、これらのほとんどが「三月三日浜下り」という女祭りの由来に関するものであり、御嶽起源を語るものは少ない。また現在でも、漲水御嶽の神は片目の蛇である、という伝説が民間に伝わっている。

本話の主なモチーフである「漲水御嶽」の起源譚についてみると、第二段落、すなわち②三輪山型の蛇婿入り譚で、初めてコイツヌとその子である三人の娘を護国神として祀る「神嶽」が創られ、その後、仲宗根豊見親という歴史上の英雄によってその石垣が造営された、とされているが、『由来記』・『旧記』・『御嶽由来記』は、コイツヌ・コイタマによる島建て譚において、すでにコイツヌ・コイタマを祀る氏子たちの手によって漲水御嶽や石垣などが造営されていた、としており、『遺老説伝』において記述が変化していることが解る。

また『宮古史伝』の「漲水御嶽」条には、「中世に至り目黒盛豊見親が争乱を治めて宮古島内を統一し、神祇崇敬の念を起こさせるため各地の御嶽を修補した時は、殊にこの靈地に重きを置いた」と記されている。この記述を信用するならば、目黒盛豊見親が、コイツヌ・コイタマという宮古島の創世神を自らの氏神として祀っていたとも考えられる。であるならば、先の『遺老説伝』における石垣の造営に関する変化は、『遺老説伝』の編纂者が、その支孫である仲宗根豊見親の正統性を強調するための改変かとも思われる。おそらく『遺老説伝』の編纂者には、歴史上の人物に重点を置きながら、他文献の伝承より高い信憑性、或い

は合理性を求めようとする編纂意識があったのかも知れない。さらに『遺老説伝』編纂者が単に一個の物語編纂者という位置に留まらず、一方でどこまでも一貫した歴史を編述しようとしていた事も、本話から窺うことが出来るのではなからうか。

(成 者 赫)

69

【原文】

一往古之世、宮古山有二神女^一。時時出^二現廣瀨山^一、以教^二本島人民^一。與那覇勢頭豊見親、始尊^二信之^一、以爲^二神嶽^一。與那覇勢頭、本島、以^二彈丸海島^一、耕器缺乏、要^二納^一款大國、給^二足資用上^一。一夜、往臨^二白川濱^一、築^二壇于沙^一、恭備^二祭品^一、并豎^二數丈竿^一、繫^二五色線^一、告^二禱衆神^一曰、予、生^二乎小島^一、深慕^二大國之化^一、未^レ知^二其所在之處^一。伏祈、天神地祇、實鑒^二此心^一、垂^二憫海島^一、賜^レ教^二大國所在^一。言未^レ畢、東方將明、竿頭線條、皆向^レ北而動。且見、啓明星下、波濤之間、有^二大國影形^一、挺^二出寅方位^一。豊見親、則知^二東有^一善國^一、詣^二廣瀨嶽^一、虔誠許愿、坐^二駕海船^一、入^二貢中山^一、自^レ此之後、一路平安、自得^二往還^一焉。由^レ是今世之人、愈加^二尊信^一、航海之時、必至^二此嶽^一、以致^二祈福^一也。

【訓読】

一往古の世、宮古山に一神女有り。時々廣瀨山に出現し、以て本島人民

を教ふ。與那覇勢頭豊見親、始めて之れを尊信し、以て神嶽と爲す。與那覇勢頭、本島は、彈丸の海島なるを以て、耕器缺乏すれば、大國に納款し、資用を給足せんとす。一夜、往きて白川濱に臨み、壇を沙に築き、恭しく祭品を備へ、並びに數丈の竿を立てて、五色の線を繋ぎ、衆神に告禱して曰く、「予、小島に生れ、深く大國の化を慕ふも、未だ其の所在の處を知らず。伏して祈る、天神地祇、實に此の心に鑒み、海島に垂憫し、大國の所在を教へ賜へ」と。言未だ畢らざるに、東方將に明けんとし、竿頭の線條、皆北に向ひて動く。且つ見る、啓明星の下、波濤の間に、大國の影形有りて、寅の方位に挺出するを。豊見親、則ち東に善國有るを知り、廣瀬嶽に詣り、虔誠許愿し、海船に坐駕して、中山に入貢す。此れよりの後、一路平安、自ら往還するを得たり。是れに由りて今世の人、愈々尊信を加へ、航海の時、必ず此の嶽に至り、以て祈福を致す。

【語注】

○宮古山…第四一話語注。○廣瀬山…『由來記』に「平良ヨリ北方海端ニアリ」とある。宮古島市西原の東、福山集落の北方の海端に位置。現在は夜籠り小屋があり、五坪ほどの空間が開けている。イビは六つあり、左から「まぎのぼう」「やびじ主」「ふじの主」「まさび主」、判読不明を一つ挟んで「ようの主」と神名が記されている。『御嶽由來記』には「広瀬御嶽女神真志らへと唱／船路の爲崇敬仕候事」とある。『旧記』は神名を「真白部」と記す。航海安全の神。○與那覇勢頭豊見親…生没年未詳。一三九〇年（察度王四一）中山に初めて朝貢したという宮古島

の首長で、近世において最も權勢を誇った白川氏の祖。童名・真佐久、諡・惠源。一四世紀ごろの宮古島の軍勢・与那覇原の一員で、目黒盛豊見親（↓第九〇話）との戦いで瀕死の重傷を負った（稲村賢敷は「与那覇せど豊見親のにーり」から、その戦闘は二〇歳頃のことであつたとしている）。その後、宮古島北東部の与那浜に隠れ住んだが、中山の進貢船が漂来したことで沖縄本島の情勢を知ったとされる（「白川氏家譜」、「与那覇勢頭豊見親逗留舊跡」他）。○彈丸：はじき玉。狭い土地の形容。「彈丸之地」で、「はじきだまのやうな極めてせまい土地をいふ」（『大漢和』）。○耕器：鋤・鍬などの耕作具。宮古島は鉄を産出しないことから、農具の材料である鉄を調達する、という意味を含んでいるのだろう。『平良市史』によれば、宮古島では農耕にピラ（ヒーラ、フィラ。「へら」の意。V字形の木製の握り部に、土掘り用の鉄板が取り付けられた農具）を主として使用したという。○納款：誓詞をいれる。『歴代宝案訳注本』に「外国や異民族が友好を申し入れること」。「款」は「のぞむ、よろこぶ、まこと、交わる」。○大國：境域の広大な國。又、勢威の強大な國。ここでは「中山」を指している。○資用…↓第二八話語注。○白川濱：『由來記』に「シラカ濱」。↓第六〇話語注。○沙…すな。汀、水辺の地。『由來記』に「白砂」。○豎數丈竿繫五色線：『御嶽由來記』に「二三丈の竹に五色の絲をつり上ケ」。多良間島に伝わる「与那覇せど豊見親のにーり」には「んなぐ船ばぎうちゆい／しなぐ船ばぎうちゆい／んなぐ船んなかん／しなぐ船んなかん／にんた起きしゆうちゆい（砂で船の型をつくり、その砂の船の中で寝起きた）」とある。「白川氏家譜」に「聚沙像造船隻」、「与那覇勢頭豊見親逗留舊跡」

碑に「以砂造船模様。備祭品立綱旗」、「球陽」に「船貌作沙上」。○衆神：『御嶽由来記』、『由来記』、『旧記』には「諸星」に祈願したとある。「与那覇せど豊見親のにーり」も、星座の運行を細かに表現している。ここでは、後文の「天神地祇」への祈りと平仄を合わせたか。○化：改まる、したがう、教え導く。○實：底本のみが「寔」とする（『増韻』「寔、與實通」、『説文解字』「寔、正也」。諸本に従い「實」に訂する。○垂憫：あわれみをたれる。あわれむ。○啓明星：「啓明」で「あけの明星、金星」を指す。「与那覇せど豊見親のにーり」に語られる「うぶらくーら」も「明けの明星」を指し、豊見親が祈りの最後に見た星となっている（『宮古島旧記並史歌集解』）。○寅方位：東北東の方位。宮古から見た沖縄本島の位置として妥当。「白川氏家譜」には「良寅之方」、「球陽」に「東寅」。○挺出：ぬき出る。秀でる。優れる。本話や『球陽』においては、島影が見えたことにより首里王府のある方角を知った、となっているが、「白川氏家譜」では、中山の貢船が宮古に漂着したことによりはじめて首里王府の存在を知った、とある。○虔誠：恭しくまこととあること。○中山：三山鼎立時代の広域地名。正史類によれば、琉球は有史以来統一王統によって統治されてきたが、英祖王統・玉城王の延祐年間（一三一四～二〇年）に至って国政が乱れ、今帰仁按司と大里按司が離反してそれぞれ北山・南山を形成したため、統一が崩れ中山の勢力範囲が首里三平等（蔡温本『中山世譜』、『球陽』は「真和志・南風原・西原」・那覇・泊・浦添・北谷・中城・越來・読谷山・具志川・勝連に限定されたという（『中山世鑑』）。この中山の範囲は、以降も「中頭」として引き継がれている。「中山」の記述は『明実録』洪武五年（一三

七二年）条に、明の太祖・洪武帝の招諭に応じ、中山王・察度が弟の泰期を遣わして方物を貢じた、とあるのが初見。三山鼎立時代、中山の拠点は浦添であったとする説がある。尚巴志が一四一七年に北山王・攀安知を、一四二九年に南山王・他魯每を亡ぼして第一尚氏王統による統一国家を樹立し、統一後は慣例により「琉球国中山王」を名乗ったため、「中山」は琉球国の別称となった。

【補説】

『由来記』卷二十「廣瀬御嶽」条、『旧記』卷之九「廣瀬御嶽」条による。『御嶽由来記』の記述が原典といえる。

本話は、宮古島東部に位置する廣瀬御嶽の発生と、その靈驗を記した御嶽由来譚である。与那覇勢頭豊見親が首里王府との交渉を廣瀬御嶽に祈願すると、忽ちその靈驗を顕わして本島の方角を示教した、という部分が本話の核といえよう。このように与那覇勢頭豊見親の中山入貢の経緯を語る類話は、『球陽』や、「与那覇せど豊見親のにーり」、「与那覇勢頭豊見親逗留舊跡」の碑、「白川氏家譜」などにも見えるが、そのどれもが微妙な差をもって生成されている。ここでは特に、本書の正巻である『球陽』との比較から考えてみたい。

『球陽』卷一「察度王」条の附には、「大明洪武年間、宮古山の主、与那覇勢頭豊見親なる者有り。童名は真佐久。此の時、本島は兵乱大いに発し、防戦弒奪して干戈息まず。雄を争ひ勇を恃みて自ら島主と爲る。是に於て、勢頭豊見親深く念へらく、騒動兵乱し民塗炭に陥る。聖国に來享して徳政に沐浴し仁風に涵游して以て人民を安んぜしめんと」とあ

る。この記事には、まず入貢以前の宮古が果てしない戦乱の渦中にあつたと記される（六四話にも通底する）。それに続き、与那覇勢頭豊見親が入貢を果たす経緯が語られており、群雄割拠する宮古島において、義憤を感じた与那覇勢頭豊見親が「聖国に來享して徳政に沐浴し仁風に涵游して以て人民を安んぜしめん」と、宮古の秩序形成を願つて中山を目指した旨の言葉が掲げられている。

それに対し『遺老説伝』は、入貢を望んだ理由を「本島は彈丸の海島なるを以て、耕器欠乏すれば、大国に納款し、資用を給足せん」としており、より実際的な問題、つまり「鉄の入手」がその背景にあったと述べている。琉球・中山を「聖国」と謳い上げる文章が、『球陽』という中山を中心とする意識を持った史書に表現されるのは当然だが、その外巻である『遺老説伝』には、琉球を「大国」と表現し、またその教化を願う言葉が掲げられつつも、宮古島の実際に根ざしたような意識が説話に描かれることは興味深い。「遺老説伝」という語りの枠は、このような正史類に対立するような異伝を掲げられる、そういった場なのかもしれない。

また『御嶽由来記』や『由来記』はともに、本文の最後に「與那覇勢頭は仲宗根豊見親よりも前代の人間である」という意味の一文を掲げている。仲宗根豊見親は、もちろん王府によって公に認められた宮古の島主（宮古頭職）であるが、その名前を出すことによって、この与那覇勢頭豊見親を、歴史の中に呼び戻す効果がある。だが、『旧記』、『遺老説伝』ではこの一文は削除されているのである。そこには、この『遺老説伝』という枠で語られる本文から歴史性を除去し、これをあくまで「遺

老」の語りたらしめようとした編著者の意識があつた可能性を考えさせる。

（木村 淳也）

70

【原文】

一往昔之世、宮古山有二男一女之神（一神名曰赤皿赤臺眞主、一神名曰濱之里主）。現降于仲間嶽曰、吾守護海船之神也。其後、狩保有二男兒。自四五歳、常造小舟、以供玩賞。十二三歳時、其父、爲糧船水梢、往在中山。一日、此兒、憶父已甚、往到磯津、遙眺海景、而慰想父之情。時見此嶽一奇石、即取以戴舟、高揚錦帆、往來海濱、以爲玩樂。一瞬之間、南風驟起、舟走如箭、往到外洋。男兒、脱衣裸身、浮水起去、而不能往撈。男兒、指島歸來、風已逆吹、難以上岸、沈浮波面、至晚天。時刻遠久、氣力已竭、遂致溺死。而小舟隨波走去、漂至那覇港。此時、父亦往海邊而遊焉。忽然見之曰、吾、看此舟、兒子所常玩者也。何故至此。想必我兒、已死于海中者也哉。而小舟、衝風凌濤來于此地。誠是奇事也。急撈而藏之於岸、遂帶回此舟、奉還其石于嶽中。自玆之後、本島之人、僉聞其事、愈尊信之、每過海洋、必詣此嶽、取嶽中之石、紅線纏縛之、藏諸箱中、開船出洋矣。

【訓読】

一往昔の世、宮古山に一男一女の神（一は神名を赤皿赤臺眞主と曰ひ、一は神名を濱之里主と曰ふ）有り。仲間嶽に現降して曰く、「吾は海船を守護するの神なり」と。其の後、狩侯に一男兒有り。四・五歳より、常に小舟を造り、以て玩賞に供す。十二・三歳の時、其の父、粮船の水梢と爲り、往きて中山に在り。一日、此の兒、父を憶ふこと已に甚だしければ、往きて磯津に到り、遙かに海景を眺めて、父を想ふの情を慰む。時に此の嶽の一奇石を見、即ち取りて以て舟に載せ、高く錦帆を揚げ、海濱を往來し、以て玩樂を爲す。一瞬の間、南風驟かに起り、舟走ること箭の如く、往きて外洋に到る。男兒、脱衣して裸身となり、水に浮びて趕ひ去くも、而も往きて撈すること能はず。男兒、島を指して歸り來るに、風已に逆吹し、以て上岸し難く、波面に沈浮して、晩天に至る。時刻遠久にして、氣力已に竭き、遂に溺死を致す。而して小舟は波に隨ひ走去し、漂ひて那覇港に至る。此の時、父も亦た海邊に往きて遊ぶ。忽然として之れを見て曰く、「吾、此の舟を見るに、兒子の常に玩ぶ所の者なり。何故此に至るや。想ふに必ず我が兒、已に海中に死する者ならん。而して小舟、風を衝き濤を凌ぎて此の地に來る。誠に是れ奇事なり」と。急ぎ撈して之れを岸に藏め、遂に此の舟を帶回し、其の石を嶽中に奉還す。玆れよりの後、本島の人、僉な其の事を聞き、愈々之れを尊信し、海洋を過る毎に、必ず此の嶽に詣りて、嶽中の石を取り、紅線にて之れを纏縛し、箱中に藏め、開船出洋す。

【語注】

○宮古山↓第四一語注。○赤皿赤臺眞主：「アカサラノアカツボノマヌシ」。神名（角川語注）。○濱之里主：「ハマノサトヌシ」。神名（角川語注）。○仲間嶽：『御嶽由来記』等には「中間嶽」。『由来記』に「磯津御嶽トモ云」とあるように、磯津御嶽のこと。狩侯集落の北方・ナービダ（長い浜）の砂浜に接して存する（『由来記』に「狩侯村後の海波打涯ニアリ」）。『平良市史』によれば、中間元と呼ばれる家系の人々の奉祀する御嶽であり、イビの規模は狩侯の御嶽のなかでは最大（横一〇メートル、奥行き三メートル）。高さ六〇センチの石垣が廻らしてある。祭神は「リュウグウ神（船路の神）」で、航海の安全、旅の無事を祈ったという。その際、イビの前の砂をお守りとして携帯した。自然物を護符として旅に携行する信仰がみられる御嶽はここだけであったが、戦後この信仰は無くなったという。また原田禹雄は「この（仲間元）――注筆者）家系の人々には、優秀な船員がいた、と伝承される」と述べる（典拠不明）。○現降：現れ降る。天降りすること（角川語注）。○守護海船之神：現在、磯津御嶽に祀られている祭神も、やはり「船路の神」とされている（前掲語注）。「海船」は字義通り「航海のための船」と考えられるが、稲村賢敷は「（海船は）楫船とも書き宮古沖縄間を往來して貢物を運搬するために使用された」と述べる。狩侯には九つのムトゥ（元）があり、その代表的なユムトゥ（四元）のうち、大城元は村創世の神、志立元は五穀の神、仲間元は水の神を祀る。仲間元は「ミヨウニヌス」という神を祭っており、「ミヨウニ」は「船」、「ヌス」は「主」で、「航海の安全を司る神」のこと。『平良市史』御嶽編には「地元伝

承でよく聞かされるものに「ナーマムトゥとイスウツ御嶽は一緒」というのがあるが、「一緒」という意味は祭神が同じということである」という。○狩俣：方言「カズマタ」、「カイマタ」。宮古島の北部に位置する集落。村は大城御嶽の女神「豊見赤星てたなふら真主」が東方の島尻当原に天降りし、男女を生んだのが始まりと伝える（『御嶽由来記』）。

この村建からの発展過程は「狩俣祖神の二ーリ」に語られる。『両島絵図帳』には「かりまた間切」と見え、根井間：狩俣・島尻・大神・池間の五か村が記される。根井間村を除く四か村は、宮古島を支配する四島の親によって統治された。狩俣間切はのち平良間切に属するが、廃合の年代は未詳。○玩賞：もてあそびめる。鑑賞する。○粮船：「粮」は「糧」に同じ。「糧船」で「糧税を運搬する船。南方の年貢米を運河によって北方に運漕する船」の意（『六部成語』戸部・糧船・注解「運船之総名」）。○水梢：水夫（角川語注）。『歴代宝案』に「卒領水梢」、「梢役」の用例あり（第二集第一巻）。「梢」は「船のかじ」の意。○中山：↓第六九話語注。○磯津：前掲語注から、単に「磯辺、海辺」という意味ではなく、角川注が言うように「仲間嶽の所在する処」と読むべき。○一奇石：六五話に「奇石」の用例あり。『旧記』では単に「獄石」。物語の展開を先取りしての表現変更か。○玩樂：『漢語大詞典』に「嬉戲取樂」。六二話、七三話にも同用例あり。↓第六二話語注。○驟：はしる。すみやか、にわか、しばしば。○箭：矢。やだけ。○趕：「趕」に同じで、「尾をあげて走る、走る、追いかける」。○時刻：刻限、時間、時期。○遠久：「久遠」と同様「永く久しい」程の意味か。九三話に「久遠」の例あり。『中山世譜』『旧記』『球陽』などの漢文の本文には「遠久」の

用例なし。筆写時の顛倒とも考えられる。○竭：枯れる。尽きる。○那覇港：沖縄本島西海岸、東シナ海に面する港湾。古来沖縄の歴史的・文化的門戸だった。那覇港が現在の範囲を指すようになったのは昭和四七年以降で、復帰と同時に従来の那覇港・泊港・那覇新港が一元化されて那覇港と称されるようになったが、それ以前は現在の那覇埠頭のみを指す。古琉球の時代には、東南アジア諸国との交易が隆盛したため、那覇港の整備も進み、大和口・先島口・唐船口が設けられた。景泰二年（一四五二）には長虹堤が築かれ、首里の外港としての重要性を増したという。○衝：「突く、向かう、当る」などの意。「衝風」で「疾風、暴風」の意もあるが、文脈から不可。○帶回：持ちかえる。○僉：↓第五四話語注。○紅線纏縛：「纏縛」は「まとい縛る」。『御嶽由来記』には「彼御嶽の石を取、赤絲の筋にて巻、守と拜持申候」とあり、御嶽の石に赤い糸を巻き付けた旨が記される。またその理由も「絲筋を船に付、上下無何事御引付可被下との御誓の由候」とされているが、『旧記』、『遺老説伝』にはこの理由説明がない。○藏諸箱中：『旧記』以降の文章で付加された表現。『御嶽由来記』には、石が具体的にどこに納められているかは描かれていない。角川本は「諸」を代名詞として「諸れ」と訓読するが、「箱中」という場所の前に置かれていることから、位置を示す前置詞的語句（「に」ほどの意）とすべきではなからうか。「箱」は「車の荷ばこ、ものを入れるはこ、こめぐら」等の意だが、ここでは「船内」という程の意味で解す。

【補説】

本話は『由来記』巻二十「中間御嶽」条、『旧記』巻之九「中間御嶽」条に依る。『由来記』の本文は『御嶽由来記』に依拠したものと思われる。仲間（イスウツ）御嶽の、航海守護の靈験を語る説話である。

『御嶽由来記』から『由来記』、『旧記』へと、その依拠の変遷を辿ると、構成に大きな変更点がある。まず、『御嶽由来記』では、「中間御嶽」に「守船の神」が出現したことにより、「上下無何事御引付可被下」との意味を込め、石を赤い糸で巻いて船に積載した旨が先に記され、それに続いて、本話と同様に小児の遭難と小船の渡海が記される（『由来記』も略ぼ同じ）。しかし、この構成からは、仲間御嶽に守船の神が降臨したことで、すでにその嶽の石を船に積載する風習が発生したように読める。一方『旧記』においてはその構成が大幅に変更され、石を船に積載する風習は、まさに子供が溺死したその事件によって発生した、と語り直されており、『遺老説伝』も基本的にその路線を受け継いでいる。航海に際し御嶽の石を携行する由来が二重化しているように見える部分を含め、合理的に解釈したための変更と言えようか。

当時の航海はもちろん危険が常に伴っており、その安全を祈ることは宮古の人々にとっても切実なものであった。ただ、ここで目を引くのは、溺死した子供の父親が「粮船水梢」だったことである。『旧記』では記されないが、『御嶽由来記』、『由来記』には「定納船渡海の時分、彼御嶽の石を取」とあって、この風習が航海一般の安全祈願だったわけではなく、貢納船の航海に関するものと考えられるのである。粟や宮古上布など、宮古からの上納物の安全な運搬は、首里王府にとっても、

対外交渉（特にヤマト）において死活問題となるものであったといつてよい。特に、宮古から首里王府への貢納品であった綾錆上布（宮古上布）は、尚永王代（一五七三〜八八年）に「織物技術の優秀性が王府内で高く評価され」たものであり、その当時から「薩摩藩が、これに対して絶大な関心を持っていた」とされる（『平良市史』）。その証拠に、慶長の役（一六〇九年）において琉球を附庸国とした薩摩藩は、首里王府が毎年納付すべき貢納品に「芭蕉布三千端、上布六千端、下布一万端」を加えており、それらの殆どは宮古・八重山地域が人頭税として負担したものであったという。本話の仲間御嶽が、ごく初期の段階で王府に公認された一六御嶽の一つであり、また、その由来譚が「遺老伝」という枠の中で残されるのも、本話の伝承背景に、貢納船の安全祈願を語る部分があったためと考えられるのではなからうか。

（木村 淳也）

71

【原文】

一昔、姑米島有二一按司一、産二下一女一。此女、聰明敏捷、才貌兼美。自二一七歳一、常拜二日月一、崇三信佛神一、萬般吉凶、盡皆預知。時有二一嫂一、常嫉三其才一、要二以謀害一。乃慫三之于岳父一曰、岳父就寢、俟三更深夜靜時一、即有上少年潛入二内房一、與二令女一私通下。其父、深信レ之、大怒大罵、急把二女子一、坐三駕小舟一、流二去大海一曰、汝若無二過罪一、漂三乎善地一。若已有三過行一、必至二鬼界一、以

受^二勞苦^一。其兄、見^レ之、乃諫^レ父曰、小妹、謹慎深戒、無^レ有^二小罪^一。何聽^二諸婦之言^一、輕易流放耶。其父聞^レ之默然不^レ答。其兄、既退而出、自付曰、吾與^二小妹^一、誠此骨肉之親也。豈忍^二棄^レ他獨生^二耶。即投^二于水中^一、扯^二住小舟^一跳^二入其中^一、便與^二小妹^一放^レ聲大哭。載沈載浮、隨^レ浪凌^レ濤、漂^二至宮古漲水津^一。兄妹携^レ手上岸、祈^二靈山嶽^一。此夜果見夢告曰、汝等、已無^二小過^一而流^二於此島^一。甚憐^二恤^一之。今、東仲宗根有^二船立地^一。早去^二其地^一、以爲^二居住^一焉。二人醒覺、夢告不^二相異^一焉。二人、深拜^二謝^一之、即尋^二船立地^一、而往視^レ之、果善地也。遂結^二草屋^一而栖居焉。恆爲^二村民^一採薪挑水傭工自食。一旦、隅屋里兼久世主、深慕^二其女才貌兼美^一、媒妁已通、結爲^二夫婦^一、生^二產九男^一。俱是賦性敦厚、容貌美麗。年稍成長、憶^二起外祖^一、遂僱^二船隻^一、催^二母與^レ父^一、同到^二於姑米島^一、尋^二求祖父之家^一、奉敘^二闊情^一。祖父感^二其情意^一、相待如^レ故。已臨^二別時^一、祖父、將^二鐵鋼竝鐵匠秘書^一、給^二與于他^一、而摘回焉。宮古山素無^二鐵鋼^一。但用^二牛馬之骨^一以爲^二耕器^一、五穀未^レ登。屢致^二饑饉^一。此人、得^レ鐵而歸、精^二造農器^一、以授^二百姓^一。百姓盡^二力田畝^一、五穀豐饒、民人樂^レ業。至^二乎彼人病死^一、村民皆感^二兄妹之恩^一、葬^二于船立山^一、遂尊^二信^一之、以爲^二神嶽^一。

【訓読】

一昔、姑米島に一按司あり、一女を産下す。此の女、聰明敏捷、才貌兼美なり。年七歳より、常に日月を拜し、佛神を崇信し、萬般吉凶、盡く皆預知す。時に一嫂あり、常に其の才を嫉み、以て謀害せんとす。

乃ち之れを岳父に懇へて曰く、岳父就寢すれば、更深夜靜の時を俟ち、即ち少年の潛かに内房に入り、令女と私通するありと。其の父、深く之れを信じ、大いに怒り大いに罵しり、急ぎ女子を把へ、小舟に坐駕せしめ、大海に流去して曰く、汝若し過罪なければ、善地に漂せん。若し已に過行あれば、必ず鬼界に至り、以て勞苦を受けんと。其の兄、之れを見、乃ち父を諫めて曰く、小妹は、謹慎深戒、小罪あることなし。何ぞ諸婦の言を聴き、輕易に流放するやと。其の父之れを聞くも默然として答へず。其の兄、既に退きて出で、自ら付りて曰く、吾と小妹とは、誠に此れ骨肉の親なり。豈他を棄てて獨り生くるに忍びんやと。即ち水中に投じ、小舟を扯き住めて其の中に跳び入り、便ち小妹と聲を放ちて大いに哭す。載ち沈み載ち浮び、浪に隨ひ濤を凌ぎて、宮古漲水津に漂至す。兄妹手を携へて上岸し、靈山嶽に祈る。此の夜果して見る夢告に曰く、汝等、已に小過なくして此の島に流さる。甚だ之れを憐恤す。今、東仲宗根に船立の地あり。早く其の地に去き、以て居住を爲せと。二人醒覺するに、夢告相異ならず。二人、深く之れを拜謝し、即ち船立の地を尋ねて、往きて之れを視るに、果して善地なり。遂に草屋を結びて栖居す。恆に村民の爲に採薪挑水傭工して自食す。一旦、隅屋里の里の兼久世主、深く其の女の才貌兼美なるを慕ひ、媒妁已に通じ、結びて夫婦と爲り、九男を生産す。俱に是れ賦性敦厚、容貌美麗なり。年稍成長して、外祖を憶起し、遂に船隻を僱ひ、母と父とを催し、同に姑米島に到り、祖父の家を尋ね求め、奉みて闊情を敘す。祖父其の情意に感じ、相待すること故の如し。已に別るる時に臨み、祖父、鐵鋼竝びに鐵匠の秘書を將て、他に給與し

て、摘回せしむ。宮古山は素より鐵鋼なし。但牛馬の骨を用ひて以て耕器を爲り、五穀未だ登らず。屢饑饉に致す。此の人、鐵を得て歸り、農器を精造し、以て百姓に授く。百姓力を田畝に盡し、五穀豐饒し、民人業を樂しむ。彼の人命死するに至り、村民皆兄妹の恩に感じ、之れを船立山に葬り、遂に之れを尊信し、以て神嶽と爲す。

【語注】

○嫂…あによめ。○聰明敏捷才貌兼美…賢く美しいことは靈力が備わっていることの現れ。○自年七歳…七歳までは「神の子」。人の数にはいつてからという意味がある。五七話の糸蒲寺でも少女の年齢は八歳。『万葉集』卷九・一八九〇にも「葦屋の菟原娘子の 八年子の」とある。○拝日月崇信佛神…日月を拝し仏神を崇信する。『由来記』では「日天月天ヲ敬シケレバ」○万般…すべての物事。○盡皆預知…『由来記』では「一事モ不違占ヒケリ」。○岳父…妻の父。しゅうと。○更深夜靜…「更深」は夜が更けゆくこと。「夜靜」は夜靜かなこと。○過罪…過ちと罪。○鬼界…死者の世界。○譜婦…いつわりをいう女の意で、ここでは嫂をさす。○他…↓第八話語注。○扯住…ヒキトドム（角川注）。「扯」はひきさく、ひっぱる意。○載沈載浮…スナハチシズミ、スナハチトドム（角川注）。浮きつ沈みつ、波のまにまに。○東仲宗根…平良間切りに属し、平良五ヶ村の一つ。現在は宮古島市平良仲宗根。漲水御嶽の創世神話によれば、創世神古意角・姑依玉の男女神から生まれた男神宗達神は東仲宗根を、女神嘉玉神は西仲宗根を領したという。○憐恤…憐れんで物をほどこす。○夢告不相異…「果見夢」に同じく、神

のお告げのある時の常套表現。○採薪…薪をとること。○挑水…水を汲む。○傭工…傭われた職工。ここでは職工に傭われることをいうか。○賦性敦厚容貌美麗…性質が温厚で容姿も美しい。常人とは異なることをいう。○闊情…「闊」は隔たっていること。例えば「闊別」は久しく会わないことをいう。○兼久世主…カニクヨノヌシ、人名（角川注）。世主、按司は同義。また、ここで求婚するのが隅屋に住む兼久世主であることは、鍛冶と炭の關係を示している興味深い。○憶起…おもひ起すこと。○相待如故…相待することとの如し。「故」はもとの意（角川注）。○摘回…「摘」には動かす意があり、ここでは宮古島へ帰ることをいうか。○鐵匠秘書…鉄器を製する奥義を伝える書。○船立嶽…フナダティ。平良市街の住宅地にある。船立堂ともいう。現在の御嶽区域は約六百平方メートル、御嶽の後方は小公園となっており、コンクリート製の屋形の祠がある。前方に灯籠が一對置かれ、神社・拝所風に整備されている（『平凡社地名辞典』）。祭神は男女神、カネトノ、シラコニヤジツカサ（『由来記』）。

【補説】

『由来記』卷二十「船立御嶽」条、『旧記』卷之九「船立嶽」条、『御嶽由来記』「船立御嶽」条に拠る。

これは、久米島から流されてきた兄妹が鍛冶の神として祀られるようになった経緯を語る、宮古島船立嶽の由来譚である。嫂の讒言により父の怒りにふれた妹を哀れんで、その兄も妹とともに久米島から宮古島に流れ着く。夢告によって船立の地をすみかとするようになったが、美し

さを聞き及んだ兼久世主と妹は結ばれ、多くの子をなした。子は成長して父母とともに久米島へ渡り、祖父の誤解をといて鍛冶の技術を伝授されて宮古島に帰還する。牛馬の骨で作っていた農具が鉄製になったために、それまで飢饉に苦しんでいた村が豊かになった。そこでその兄妹の恩を感じて村人は彼らを神として御嶽に祀ったという。

宮古島に限らず、鉄製農具の使用によって作物の収穫は倍増し、その普及は人々の生活を一変させた。そういうレベルにおいては、稲の伝来も鉄器の普及及び鍛冶技術の伝来も等しく、画期的な出来事であった。従って鍛冶神は、開拓神以外にも農業神として祀られるようになったといわれている。鍛冶が伝えられてから後、鉄製農具の利用によって著しい農業改革がなされ豊作が約束されるようになったことを鑑みれば、ここでの鍛冶の神はいわば第二の開拓神・始祖神として捉えることもできるだろうか。この説話は宮古島の第二の始祖伝承として読みかえられるものでもある。

ここで注目すべきは、洪水など不可抗力によってではなく、罪を得て流された結果兄妹二人がこの地に流れ着き、宮古島の鍛冶の神として祀られるようになったことである。説話はこの妹の罪を嫉まれたゆえの冤罪とするのであるが、例えばウツコ船伝承や貴種流離譚では何かしらの罪を得たためであったように、流される契機には必ずや流される必然性、つまり負の要素がつきものである。

一見継子いじめ譚のように見えるこの説話の、執拗なまでに妹を思いやる兄の行為は不可解で、近親相姦があったかのような錯覚に陥らせる。もちろん説話は直接兄妹の近親相姦を語ることはないものの、この

流離の背景には禁忌を犯した罪が隠されてあるように思われる。何故なら近親相姦とは始祖伝承を語る上で必用不可欠な要素でもあるからだ。これを第二の始祖伝承として捉えるのであれば、ここに兄妹始祖伝承における近親相姦をみることも可能なのではなからうか。

また、ここでは船が重要な役割を果たしていることを忘れてはなるまい。船ははじめ、スケープゴートなど罪を流すものであったが、宮古島に漂着してからは負(穢れ)が転じて、鉄に象徴される豊饒をもたらすものへと変化している。船のもつ両義性からすれば当然のことではあるけれど、船は災いを追放するものであると同時に、異界から富をもたらすものでもあった。

(堂野前 彰子)

72

【原文】

一昔、宮古山友利村平屋地有^二男童^一。賦性敏慧、存心正直。幼時、俱喪^二雙親^一、屋廬壞敗、第宅荒涼、身無^レ所^レ依、或住^三于岩洞之中^一、或宿^三于樹蔭之下^一。常爲^三村民^一、採薪挑水釣漁度^レ日。然而孝心愈深、祭祀匪懈。一日、偶往^三螺草浦^一、垂釣漁魚時、忽有^三神女^一(名稱^二歌張^一)、駕^三小舟^一而來曰、妾、求^レ爲^三君妻^一。男童曰、吾、幼失^二父母^一、已爲^三孤身^一、無^レ所^レ依告^一。何想^レ娶^レ妻耶。神女曰、妾、憐^三君孤身^一、特來求^レ配。男童固辭。神女強請頻勸。男童、無^三言可^レ辭^一、結爲^三夫婦^一、俱到^三舊宅^一(在^三山立嵩^一)、結^二構茆

舎^一、以爲^二栖居^一。而茹舎、不^二終夜^一而成。神女有^二一布袋^一、深藏^二掩之^一、不^レ與^二人看^一。只米自^レ袋摸出、炊食度^レ日。不^レ覺、光陰易^レ過、日月疾走、歷^二乎數年^一、生^二得^一一女^一。名叫^二應田原^一。年已成長、嫁^二乎他人^一。即神女、與^レ夫共、荷^二其布袋^一、往^二到螺草浦^一、即化^二巨魚^一、入^二于海中^一矣。其女子、多生^二孫子^一、孫子繁昌。已到^二白髮^一、顔色不^レ衰。至^二其病故^一、葬^二之于山立嶽^一。後、亦開^レ棺視^レ之、竟無^二屍骨^一。故人崇^二一信之^一、以爲^二神嶽^一。而往^二來海洋^一、及求祈者、必到^二于此^一、而祈禱焉。

【訓読】

一昔、宮古山友利村の平屋地に一男童あり。賦性敏慧、存心正直なり。幼時、俱に雙親を喪ひ、屋廬壞敗、第宅荒涼として、身依る所なく、或は岩洞の中に住し、或は樹蔭の下に宿す。常に村民の爲に、採薪挑水釣漁して日を度る。然り而して孝心愈深く、祭祀懈らず。一日、偶々螺草浦に往き、垂釣漁魚する時、忽ち神女あり(名を歌張と稱す)。小舟に駕して來りて曰く、妾、君の妻とならんことを求むと。男童曰く、吾、幼くして父母を失ひ、已に孤身と爲りて、依告する所なし。何ぞ妻を娶るを想はんやと。神女曰く、妾、君の孤身を憐み、特に來りて配せんことを求むと。男童固辭す。神女強請頻勸す。男童、言の辭すべきことなく、結びて夫婦と爲り、俱に舊宅に到り(山立嶽に在り)、茹舎を結構して、以て栖居とす。而して茹舎は、終夜ならずして成る。神女に一布袋あり、深く之れを藏掩し、人に看せることを與へず。只米を袋より摸出し、炊食して日を度る。覺へず、光陰過ぎ易

く、日月疾走し、數年を歴て、一女を生得す。名を應田原と叫ぶ。年已に成長し、他人に嫁す。即ち神女、夫と共に、其の布袋を荷ひ、螺草浦に往き到るや、即ち巨魚と化して、海中に入る。其の女子、多く孫子を生み、孫子繁昌す。已に白髮に到るも、顔色衰へず。其の病故に至り、之れを山立嶽に葬る。後、亦棺を開きて之れを視るに、竟に屍骨なし。故に人之れを崇信し、以て神嶽と爲す。而して海洋を往來し、及び求祈する者は、必ず此に到りて祈禱す。

【語注】

○友利村…砂川村の東南に位置し、北は西里添村、南部は海に臨む。方言ではトゥムズ。砂川間切に属した。現在の宮古島市城辺友利。両島絵図帳に友利村と記され、高六〇八万石余。万曆三十五年(一六〇七)白川氏惠忠が友利首里大屋子に任じられ、嘉慶十二年(一八〇七)頭平良大首里大屋子職に白川氏友利首里大屋子惠寛が任じられている。当村は首里大屋子村と称されたが、それは当村と松原・狩俣・伊良部・多良間の五ヶ村に限られる(『平凡社地名辞典』)。○男童…「童」はもと目を刃物で突いて見えなくなった男の奴隸のことをいうが、「童男」として未婚の男性の意か。○賦性敏慧…性質が賢い。「敏慧」はさといこと。賢いこと。○存心正直…「存心」は心根の意。○屋廬…すまい。○第宅…テイタク。屋敷のこと。○螺草…ミナコサ。地名(角川注)。○歌張…ウタハル。神女名。(角川注)。○強請頻勸…「強請」は強いて請う。「頻」はしきりに。○茹舎…「茹」はじゅんさい、水草の意。あるいは茂るさまをいう。「茹屋」はかやぶきの軒、「茹廬」はかやぶきのい

おり。○結構：家を組み立てること。○終夜：『由来記』に「彼女、天女の変化ニテモアリケン、一夜ノ中ニ結構成家ヲ作り」○蔵掩：「蔵」も「掩」ともおさめる意。○摸出：取り出す（角川注）。○応田原：オタハル。人名。○化巨魚：『由来記』では「夫婦共スジト云大魚に化ス」○病故：病気で死ぬこと。○山立嶽：ヤマダチムトウ。友利集落内、集落センターの北方約百メートルの畑の一角、雑木林中にある。建物はなくイベには石の香炉が数個ある（『平凡社地名辞典』）。

【補説】

『由来記』巻二十「山立御嶽」条、『旧記』巻之九「山立嶽」条、『御嶽由来記』「山立御嶽」条に依る。護得久本はこの項を欠く。

この話は山立御嶽の由来譚である。幼くして両親を失った男は心根がよく正直であったために、船に乗ってきた神女と夫婦になり、子をなした後は二人して海へと帰っていった。二人の間に生まれた娘は嫁いで多くの子を産み、白髪になっても若々しかった。病気で死んだために山立嶽に葬ったが、しばらくして棺を見ると屍なく、ゆえにその墓のあったところを御嶽として祀ったという。

この話のプロットはすべて、オタハルが神として祀られる必然性を語っている。第一に、彼女自身がそもそも異界出身の母から生まれており、本来はこの世界の住人ではないこと。第二に、葬ったはずの屍が棺から消失していること。第三に、白髪になっても若々しかったということ。これらの要素はオタハルの特異性を示しており、四二話の善蠅大屋子や一〇一話の饑来婆のそれに同じと考えれば、屍喪失という事象から

オタハルも異界へと帰っていったのだと捉えることもできるだろう。

また、男が海から訪れた神女と結ばれるその理由は、その心根の正直であることに依っている。それは『遺老説伝』が常に描こうとする儒教思想である。先の尸解や不老不死が道教思想であるとすれば、この話には儒教、道教、ノロ祭祀の三つの宗教が混在しているといえる。

ところで、この神女が袋の中から米を取り出すくだりは、ソナフカの瑠璃色の壺を彷彿とさせ、ヤマトのオオゲツヒメやアカルヒメの伝承を想起させる。異界から来た女性が豊富な食料をもたらすというプロットの根底には、富（豊穰）は常に異界からもたらされるという幻想がある。

そしてそれは、『遺老説伝』に収録されている竜宮譚のほとんどにおいて竜宮を訪れるのは男性であることに示されているように、竜宮世界そのものが女性原理を象徴していることへと繋がっている。母なる異界は豊饒そのものであり、そこから訪れる神女によってこの世界に幸はもたらされる。幸は具体的な食物であったり穀物の種であったり、あるいは子孫であったりと様々ではあるが、竜宮からもたらされるのはいつも幸であり、反対に竜宮へと追いやられるのは災いである。決して竜宮から不孝がもたらされることはない。

そして竜宮から訪れた異界の女性は、この世の男性との間に子をなせば、必ずや竜宮へと帰っていくこともここで付け加えておきたい。それはヤマトにも共通する、竜宮女房譚のプロットである。彼女たちは自分たちの特異性を失うことなく、竜宮の住人であることをやめない。従って御嶽に彼女たちが祀られることはなく、祀られるのは決まってその子孫か竜宮を訪れた人間（男）なのではなからうか。

(堂野前 彰子)

附記

本研究は、二〇〇四年度に採択された文部科学省学術フロンティア事業の一部門の研究に、明治大学人文科学研究所の重点研究をリンクさせて、大学院の演習としておこなわれた成果の一部である。